

師範學校編輯小學讀本

三

特54

969

大日本教育會館

四	二
---	---

五册	三號	三架	六函
----	----	----	----

小學讀本卷之三

第一

水の動物植物の養液として、地球上、尤、要用のものあり、水をまきとさし、萬物生育を成ることを得べし、水は、止水、流水の別あり、池水、湖水を、止水といひ、河水と、流水といふ、湖水は、陸地、全く四面を環り、中窪なる地は、停まるなり。

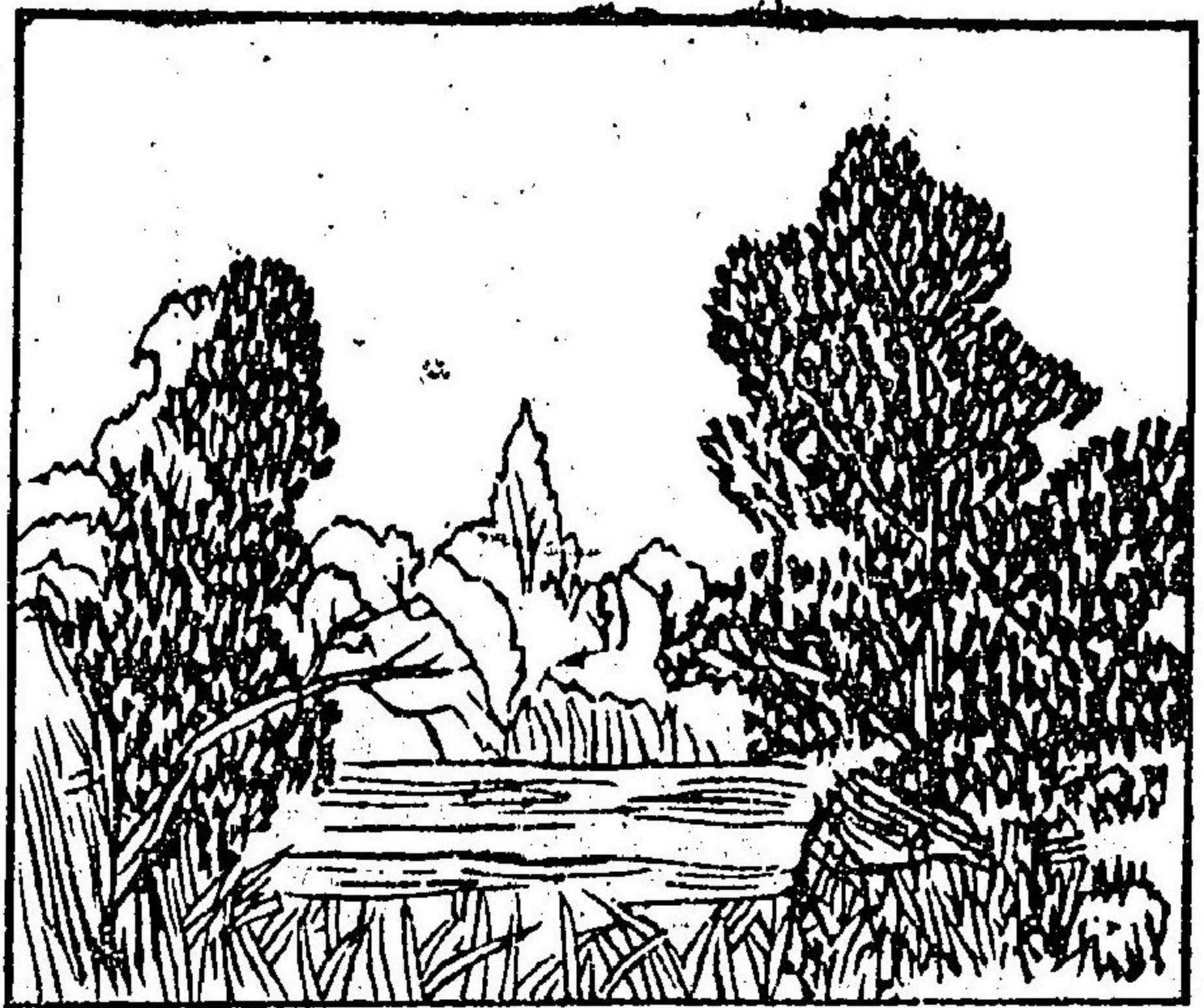
田中義廉 編輯
那珂通高 校正

河水といふ山間の谷谷より湧き出でて海に注ぐをいふ

此圖ハ林中の湖なり此水の陸地全く四面と圍みたるゆゑは流れ去ることなし

今ハ夏日ありや又冬日なりや木葉の茂りたるを以て夏日なることを知る○

冬日ハ總て木葉なきなり○然る多く木葉なき唯



松栢の類のみ葉あり○野草ハ冬日はても生ずるなり○否、生ぎぬことなし

汝ハ林中ハ鳥あり又水中ハ魚ありと思ふや○必これあらん唯明ハ見ることを得ざるのみなり

林間ハ湛へたる水上ハ數多の水鳥ありて游泳せり水鳥ハ閑静ふるど好むものゆゑ其浮べる處ハ景色甚幽邃なり

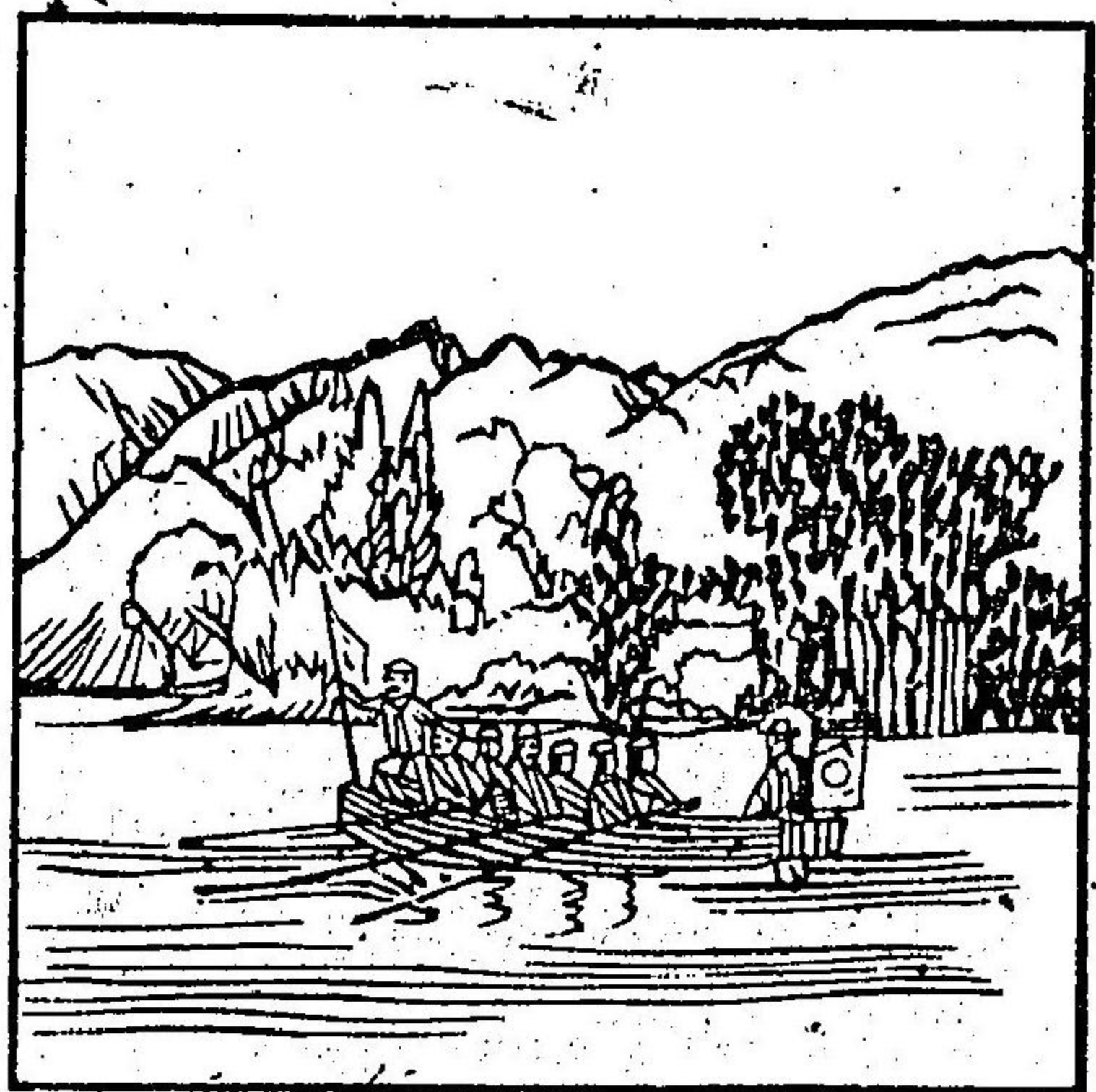


此圖も亦林中の湖なりこれハ

前より示したる圖の湖と同じきう。○然る同じ湖なれども我が見る所は因りて異なるをう。

今湖上は浮べる舟あり舟中も多くの人と載せしうこの人の携へたる長きもの何なりやこれハ水棹にて舟を動かす具なり。○此舟ハ何れの方へ行くや、こきえ左の方へ行くなり。

此舟ハ前の舟と同じきう。○否同じからば此舟ハ前



の舟より大よして八人と載せたり。何如よしと舟を進むるや。○此中六人の携へたる權を操りて舟を進むるなり。○舟ハ權を操りたる人の何きの方へ行くぞといふよ其後の方へ行くなり舟の艫と舳は居る人も何を爲るぞといふよ先の人ハ水前を測り後の人ハ舵を操れるなり。

第二

此圖ハ蜜蜂なり。蜜蜂の蜜を巢の中は貯ふると見よ其勤實は容易なり。

天地の間は生と稟けた
るものい、蟲さらも猶か
くの如し、況や人と生れ
たる者や、余今汝等よ、
蜜蜂の蜜を貯ふる状と、
語るべし、

此蜂よ、舌、髮筋の如き舌
あり、此舌を花の中よ、入
きて、蜜を吸取るなり、

此蜂、夏の際に旭の昇るを待ちて、巢の中より飛



出種々の花を尋ねて、其中より、力の及ぶ限り、
蜜を吸取りて、歸せり、

其際に、何如なる暑き日よも、怠らば日々飛去り
て、飛回る、夏の永き日と、一刻の時間も、徒ら費
に、ことなく、蜜を、巢の中よ、積置ゆ、冬よ至り
て、一種の花無き時よも、食料よ乏しきことなり、
此蜂よ、巢毎よ、必秀て、大なる、蜂ありて、これ
を蜂の王といふ、又蜜奴とて、蜜を、取らざる蜂、
頭あり、此蜜奴を、かの能く勤むる蜂ども、これ
を逐出だして、共に、巢の中よ、棲まざるなり、

汝等も幼時より日々勉め勵みて、此蜂も恥ぢざるやう心がくづりも一怠惰なく、其業を勉めざるごとく、此蜜奴の如くあらば、必世間の人より疎まれて、遂に與へ交るものもなきに至るべし

第三

人と交るよ、眞實を以てして、決して虚言すべからば、○衆人は對して、親切に交り、言ひ必忠信を、主とまゐる時、衆人も亦我を愛して、其身も自幸福を得べし、
汝の虚言の惡しきことを知まらば、○然る、虚言

の惡しき事の屢こき聞けり

苟虚言する時、人皆汝を棄て、顧ざるべし、此の如くなるを、何と以て、身の幸福を得べき、

自其惡しきことを知りて、虚言したる後、汝の心は快きや、○否、快からば、

然らば、汝の心は惡しきことを、知りたらば、決して、これを犯さべからば、縦令人の見ざる所にて、も常は父母、教師の面前と思ひて、其行狀を慎むべし、これと、獨り慎むといふなり、

故は善良よし、正直なる兒の神の助を得て、其身の幸福を享ふこと、疑無し。

若又誤りて窓を破り、書と汚し、戸の鍵を失ひ、机上の墨を翻せる時など、父母教師の前に行き、自其始末を訴て、罪を謝せ、是唯よ人と欺らざるのとならば、亦自欺らざるなり、自欺らざらんことを欲



せば、決して虚言をばつらず、只此一事に、到底善人となるべきの道なり。

人と約して、これに背くも、不善の甚しきものなり、必衆人の擯斥を免を得ば、故に、一旦約したる言へ、務て正實を行ふべし、苟信を、朋友を失ひ、縦令學術に通じとも、生涯身と立つること、能はざるべし。

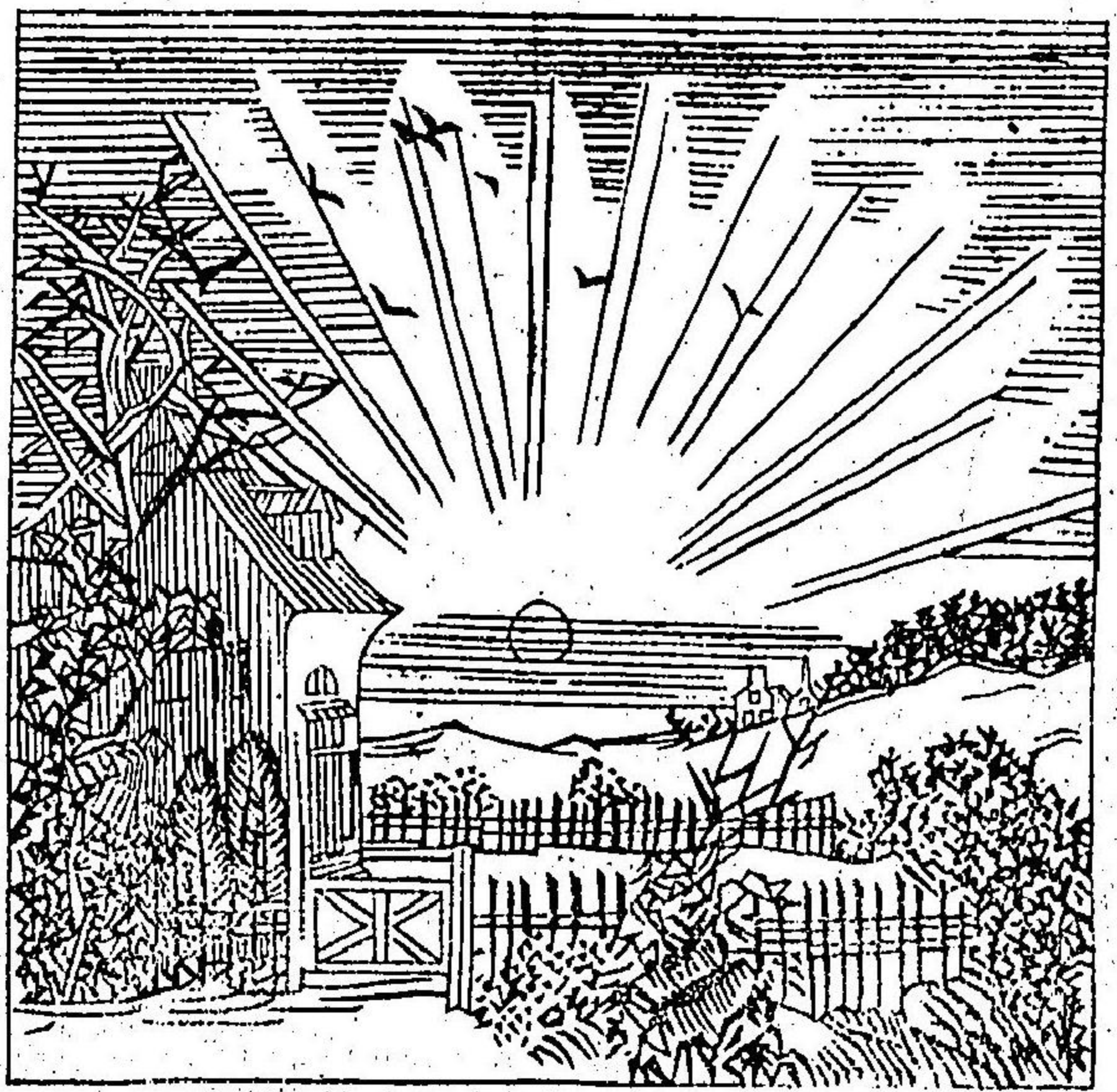
悪事の、小なりといへども、忽ちふすべからば、其一念、漸長ざるときは、是非を明よし、善惡を審よむること、能はざるに至るものあり、人として、是

非善惡の心無き者あらざれば常は善は就き惡
 を去り是と行ひ非と拒ぎ虚言せぬ約束は背り
 ず其快りらんことを求むべし心まことと快き
 を意と誠ふもといふ此の如くあるときハ必衆
 人の敬愛を得て神の助と蒙り其身は大有る幸
 福と享らものなり

第四

夜將は明けんとする時雞先鳴く夜既は明くを
 ハ鳥雀鳴く
 汝ハ寢所は在りて雀の鳴くを聞きしや此鳥ハ

夜明けて後の眠ること
 あらび人としてハ鳥雀
 は劣るべからず故は鳥
 の聲を聞くときハ直は
 起き出づべし



神ハ晝間人々ハ日光を
 與へて其業となすハ便
 ならしむ然らば夜明けて後まで猶寢所は在る
 を神の恵を棄るなり故は汝等必夜明けぬきハ
 直は起き出でハ業は就くべしこれ身と立つる

の初なり

幼稚のものに、夙より起きて勉強し、無益な時を費すことおけきば、その習性となり、壯年の後業と勉むるふも、倦怠の心と、生ずることなし。

夫神へ、必勤むる人よ、おらざまば、妄に物と與へばして、勤むまば、物と與ふるものなれば、身の勉強へ、幸福を生む母なりと知るべし。

されば人々、能く勉強して、身の幸福を求むべし、勤むれば、必功あり、惰まば、必功なし、今日勉めば、とも、明日ありと云ふこととなりま、今年學をす

も、來年ありといふことなり、光陰の矢の如し、一度去りては、復還らず、壯年は至りても、一業一事と、習ひ得ることおまじ、遂に貧窮困苦に陥るも、皆自招くの禍なり。

第五

二人の童子あり、共に野に出で、樹陰に息へり、その地の野草、灌木、茂きると以て、氣候の夏あることと知ら、

一人は、一卷の書を開きて、こまに讀み、又一人を、坐して、其文を聽くことと喜ぶよ、似たり、我其聲

を聞うざれども、今其顔色を見て、其心は喜べることを知まら、○何よよくて、喜悅の心、顔色は形をさ、や、○微く笑へる、色あるを以て、其喜悅の心あるを、知まら、人の口と聞うずとも、其笑を合する、心は喜のあると、告ぐら、如し、顔色を、喜怒を、人よ知らしむる、徴なきはなり、



凡、喜、怒、哀、樂の情あるは、如何よ、これと隠さんとを、あとも、顔色の徴は、覆ふづ、あら、されば、人よ對して、不平の心と、懐く、親切よ、過き、べし、何となれば、もし、我心は、毫も、怒き、ふく、不平の心あるは、必、顔色は、形は、る、者なれば、なり、其他、或は、不幸あるとき、或は、倦怠せる、とき、皆、其、心と、顔色は、形と、して、人よ、知らし、め、ざることなり、

第六

凡、世間ある人、貴きも、賤きも、父母より、生ま

れざるいなし故に父母の我身の出で來し本ふ
 きべ本と念るまじきことなり況てや養育の恩
 山よりも高く海よりも深くして幼き時より晝
 夜艱難苦勞して抱き育てられたるをやされば
 深く其厚恩と思ひて孝順の心怠るべからず
 子の父母はつかへて孝順なるは神より命じた
 る務なきべこれと念るべからず苟不孝の行あ
 れば唯は人の憎を受くるのみならず必神の責
 を免きざるものなり

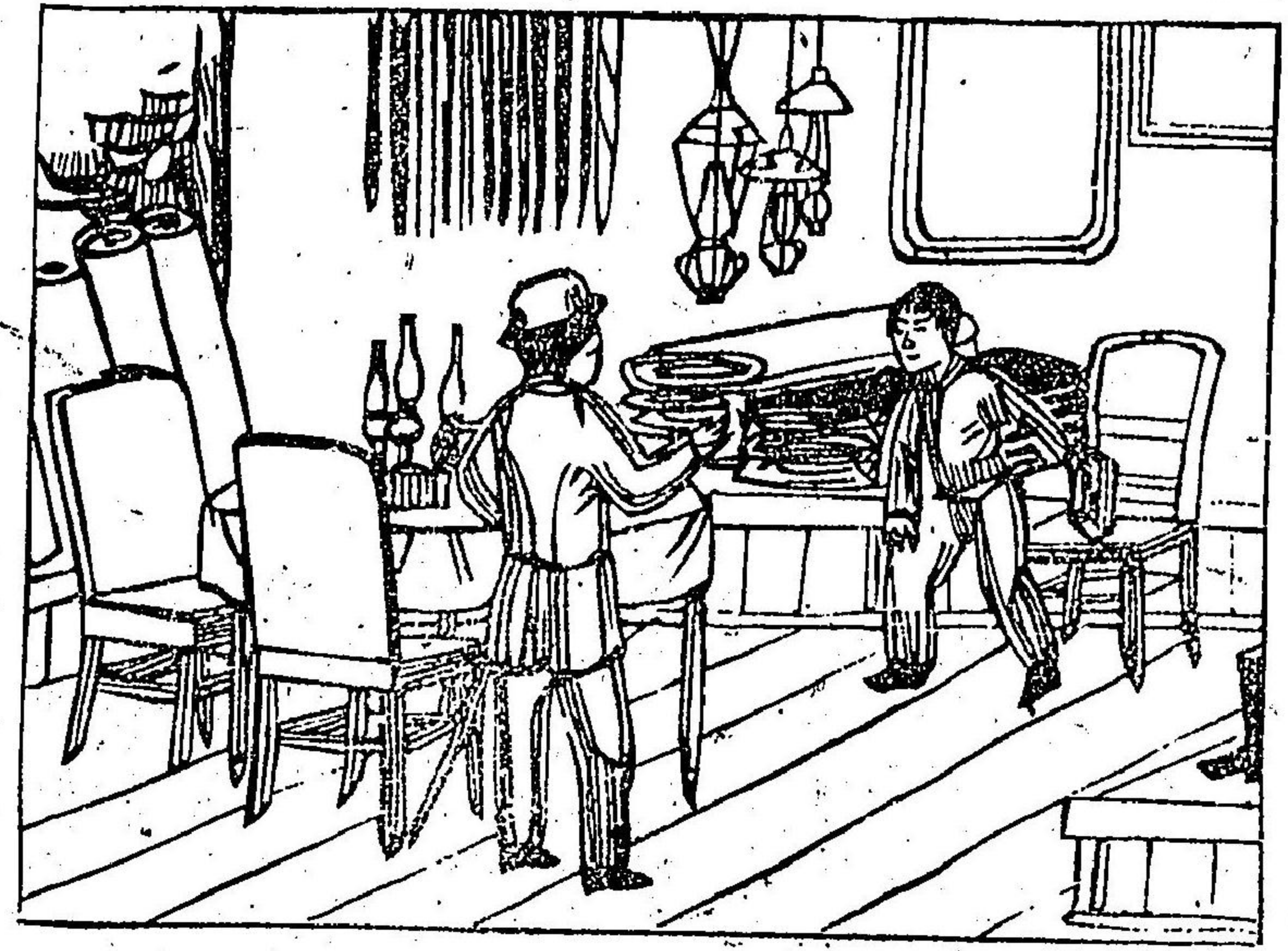
神も我は性命をさづけ又我を守りて幸福と與

ふるものなきども神は代りて我を養育せし
 父母なりされば父母の神と同じく敬ひ尊び何
 事も逆ふことなきを孝順といふ

苟父母の命は逆ふことあれば神の責を受け
 禍は罹るよより父母の誠のこが身の及ばざる
 所を補ひ助くる所をして即神明の命なりとい
 得決して背くべからば

昔年一人の男子あり其人とあり温順よくて幼
 稚のときより兩親を孝行たぐひなきものなり
 き其家固富むるはあらざれども貧乏人と憐

み凡て人よ交るよ信實
 なるゆゑよ誰いふとな
 く此男子よ善人と呼な
 せり幼き時ハ近郷の家
 よ僕たりしが夙よ起き
 て一事一業も怠ること
 なく暇あるときハ手習
 よ心よ盡し又好きて讀
 書算術と學びしゆゑ幾
 ならずらんに利發の人となきり



主人より暇を與ふるときハ己の隨意よ遊ぶこ
 となく必我家よ歸りて父母の安否を問ひ終日
 膝下よ居て事よ従ひ父母の心よ慰ることを勤
 とせり

主家と出で後ハ瑣細なる商をしつ渡世せし
 ぐ人々此男子の正直なるを知て其物品を信じ
 けきバ幾もなく稍豊となきり

其後父と喪ひて母の心と養ひたうが晝夜怠お
 く介抱して其心よ違ふことなく假よも母の厭
 嫌ふことをなきお常よ善事と好みて慈愛の心

禽獸草木まで及びけまば、其家次第は繁榮して、
富有の身となまるとぞ。

宜あり、孝の萬善の本といへること、此男子が生
涯の正直慈惠學ばずして、此に至まると者、皆孝よ
う、生ばる所なり。

子の父母は仕へて、孝順ならむべきは、天地自然の
道よしと、須臾も忘るべからば、然まども、外物の
為よ、心を奪われて、其道を失ふ者も、少ありらざ
れば、常よ其心を守り、自然の道と忘るべからば、
今日、太平の世と生きて、妻子と與ふ、鼓腹の樂と

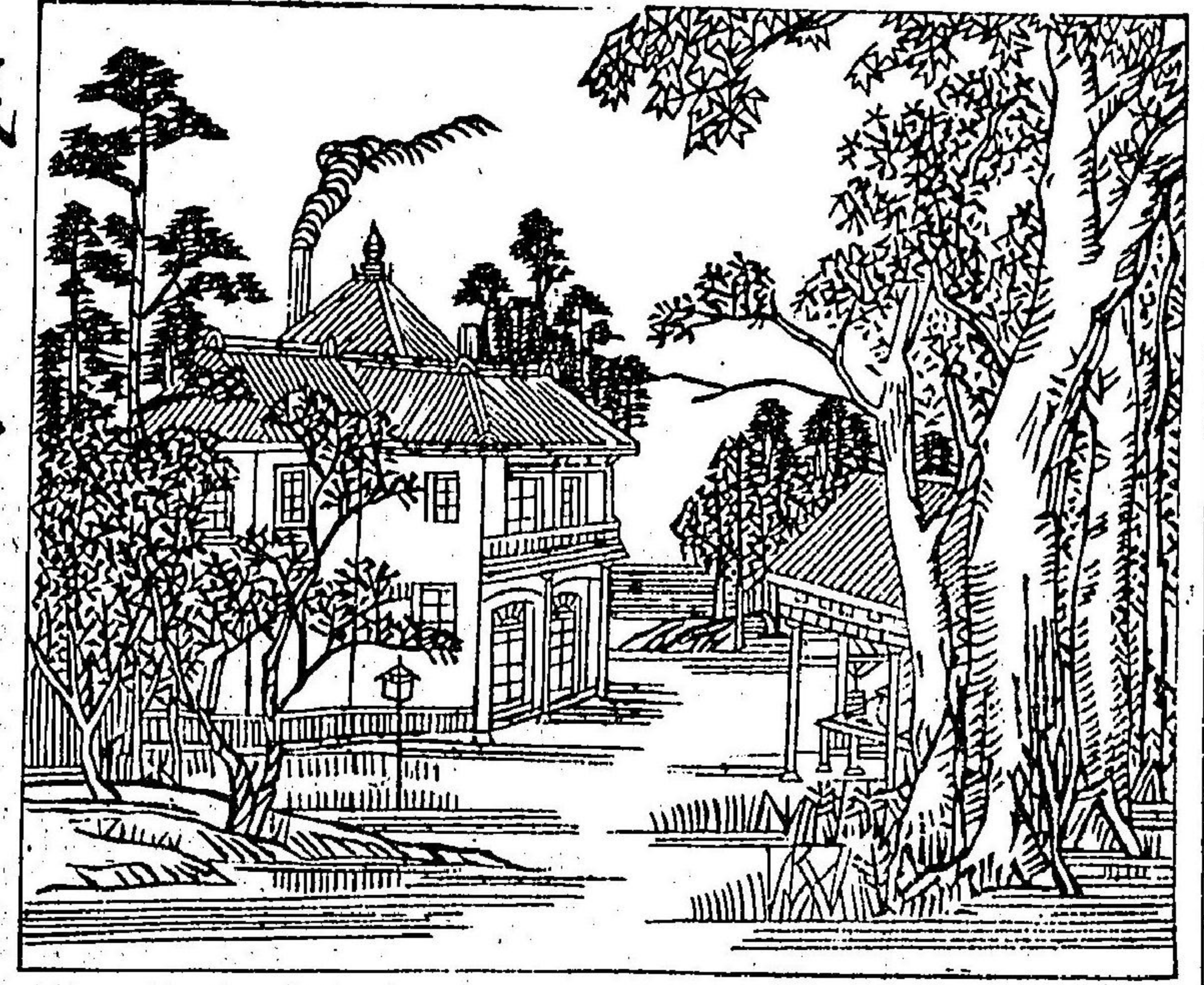
享くること、何の幸り、これと如らんや、故に宜し
く、國法を遵守して、各其業を勤むべし、凡人の子
たるもの、幼時より、親を事ふること、此男子の如
くせず、あるべからば、

第七

此圖せる所へ、田舎の富家あり、其四面よ、茂林
花木ありて、宅前の平地よ、芝と栽たる、好ま景
色の所あり、

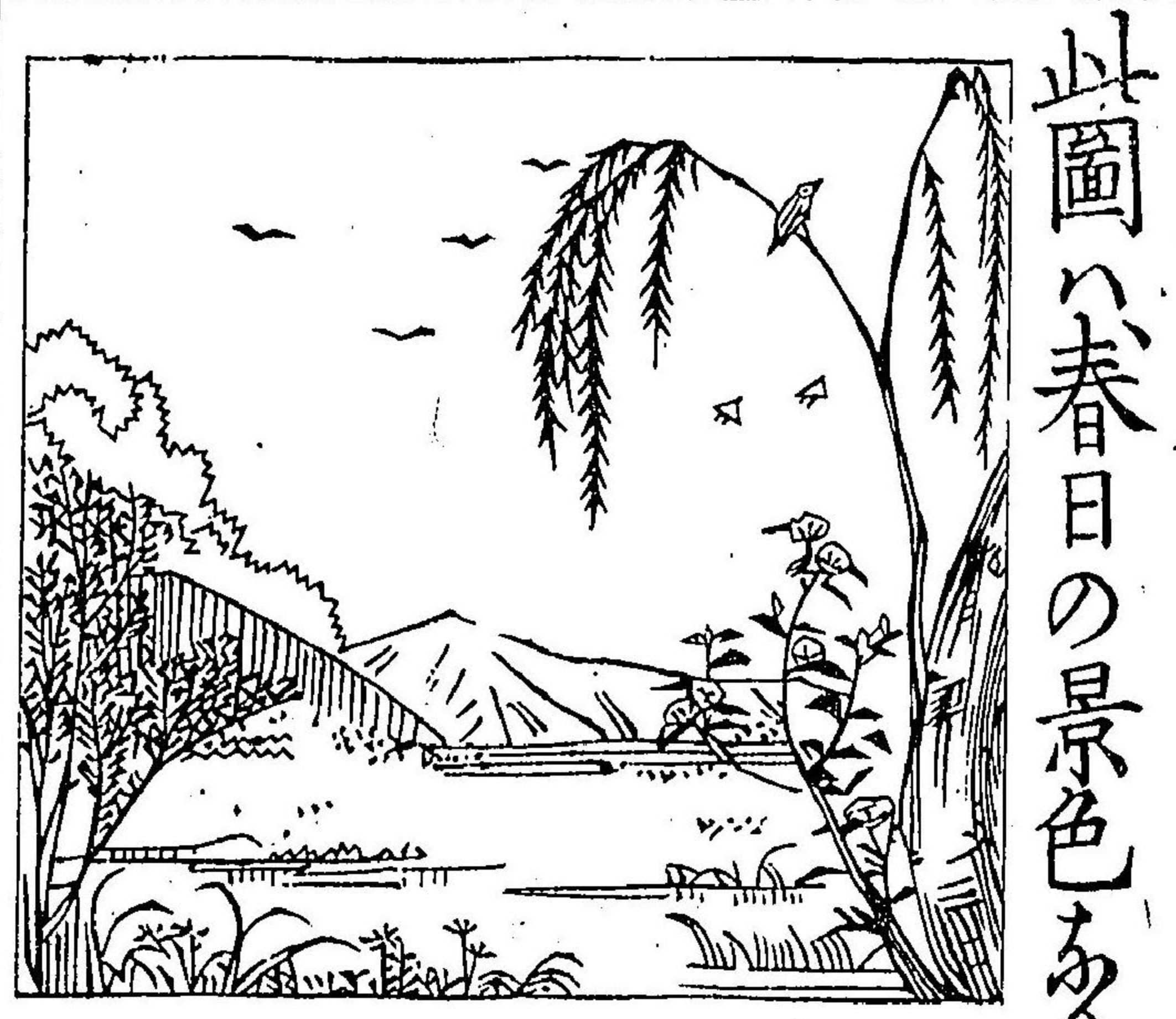
此屋へ、數多の棟、合まるとり、
能く見て、其様と知るべし、

屋の上よ、突き出でた
るも、烟筒をうへ、これへ
暖室爐の烟と出だす
ためよ、設たるをうへ、
凡て物と見るときは、
何の用たることを考
へ、又其形と、能く記憶
をべし物と見るとして
も、其用を考へず、又記
憶せざる人の終身事と識ること、能とざるもの



なり

第八



此圖は春日の景色あり、禽鳥は晴空に舞ひ、蜂蝶
も芳草に戯まじり、
木の嫩芽を生じ、草は新
葉と發し、看むとて、緑
ならざるいな、總て天
生の物の春に至るを、美
しき衣裳を、着くらが如
し。

人の少年ハ、一生中の春時なれば、才能の種子也、
時くともあらず、

少年の時ハ、精神も、充滿し、年數も、未遠けきば、勉
學びて、生涯の安樂也、冀望をばべし、

少年の時ハ、勉學せざるものハ、一年の春時ハ、種
子と時りざらんと、同ドク、生涯智識を開くことな
し、

斯る少年等ハ、縱今富貴の家ハ、生まるとも、遂ハ
ハ、必貧窮とならん、

今世上ハ、富貴ある人と、貧賤なる人とあり、其智

識ハ、行狀とを、見れば、富貴なる人ハ、智識も、開け
て、行狀も、亦正し、とも皆少年の時も、能く勉學び
たるものなり、又貧賤なる人ハ、智識も、なく、行狀
も、亦正し、からば、これ皆少年の時も、勉學せざる
ゆゑなり、

されども、人ハ、幼少の時も、よ、師の教示ハ、從事し
て、一身一家也、立つることを、學ぶべし、

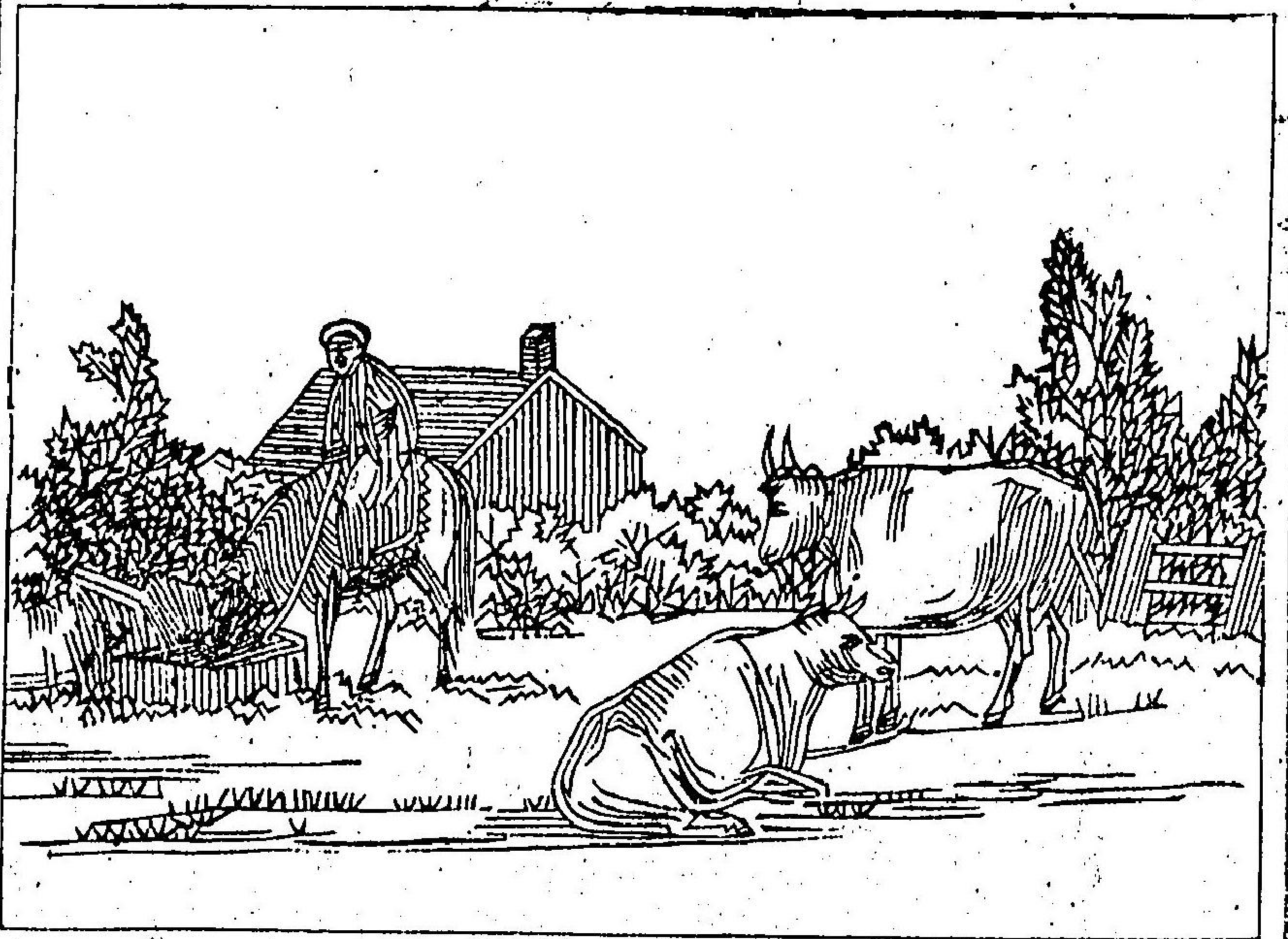
師傅ハ、父母ハ、替りて、兒童を、訓誡し、善道ハ、進む
ことを、教ふるものハ、我身ハ、善教と、學術とを、
授けて、我資益を、なす由り、父母ハ、等しく、尊敬

して其恩を忘るべからば

第九

人の萬物の靈なきは禽獸蟲魚と異なり能く
眞直よ立ちて歩行は獸に能く物を見香を臭き
聲を聞き食を味ふるは人と同じと雖其歩行
るよの立つこと能く又聲を發せれども言を
出ださず語ること得ば人の能く言を出さず
て意中と語ることを得又能く諸物と推考して
物理と解す是其異なる所なり
そまこの世界の全く人の住居る爲よ神の造

りたるものにて世界
先即人の住所なり
既よ人の爲よ此世界
を造り日なり月なり
て物を照らしまこと其
目と歡むしむるよハ
地上よ芳草と生と梢
頭よ美花を開くよ
人の食物と須むるも
のゆゑよ田野よ於て



穀物と與へ、山林よ於て、鳥獸を與へ、河海よ於て、魚類を與ふ、

人へ、衣服を須むるゆゑよ、木綿と蠶を生ぜしめ、或ハ野獸の背ふ長き毛を生じしめ、衣裳を製るこ
とと得せしむ、

人ハ家屋を造り、又諸の器械を、須むるゆゑよ、地
中より、銅鉄などを出だししめ、これを造らしむ、凡
て人の、闕くべからざる物を、一とししめ、與へざる
ことなり、

人もし、好音を好むときハ、鳥これが為よ、歌ひ芳

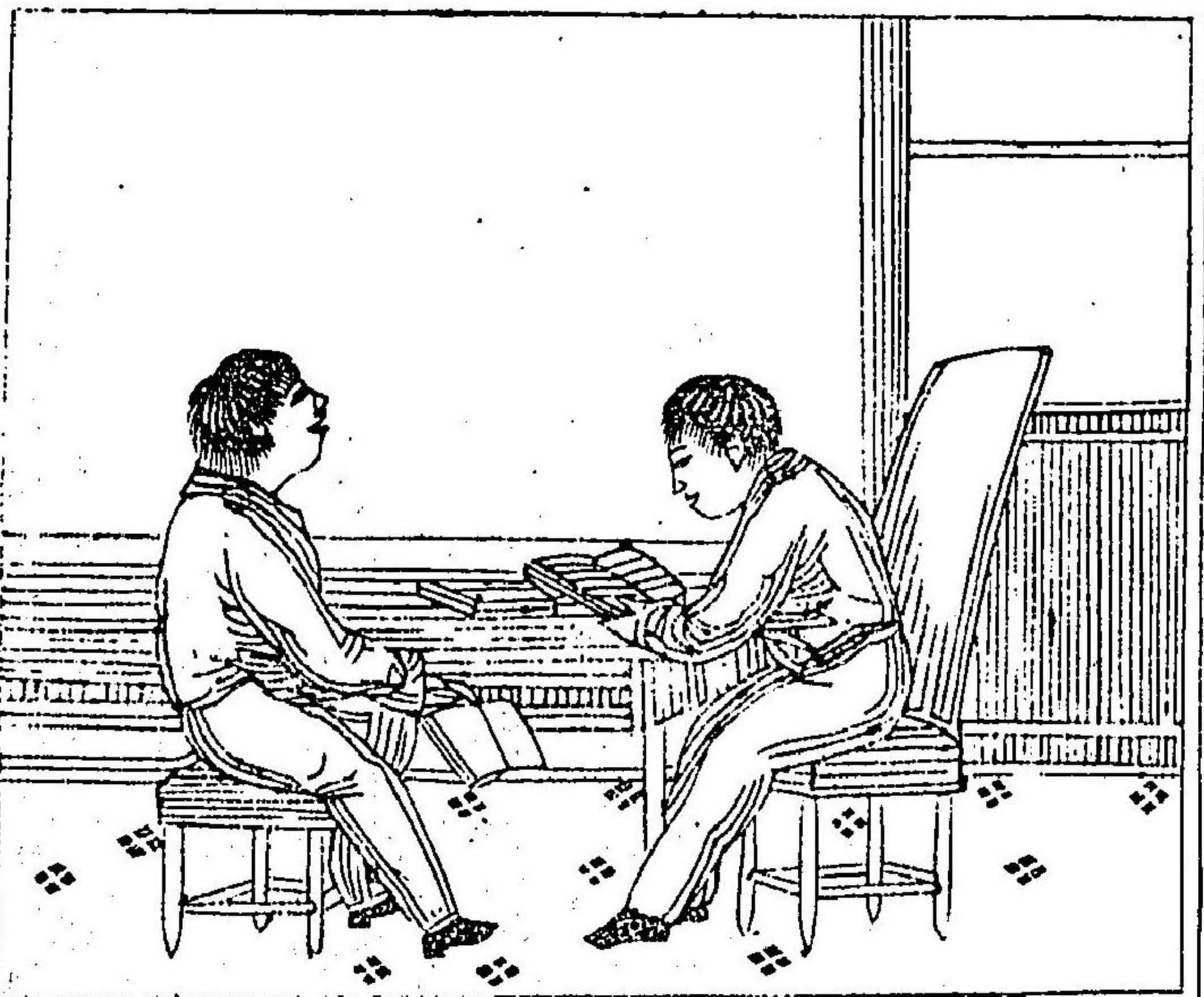
香を好むときハ、花これを為よ、薫じ暑日ハ、雷
雨あり、炎熱これが為よ、去り寒天ハ、薪木あり、
燒きて以て、煖を取るべし、これ皆神の賜ものよ
し、所とししめ、これ有らざるハ、凡此地上及
河海の萬物を、禽獸、蟲、魚、山林、草木の花實よ至る
し、皆人を養ふが為よ、神の與へたるものなり、
神既よ此諸物を、人は與へて、足らざるものなり、
らしむ、故よ人々慎みしめ、神の賜ものを受け、我身
の生活を、計るべし、

然まども、惡心、惡行の人ハ、此賜ものを、受くるこ

と能くばし、生涯貧窮なれば其安樂を願えん
よへ必勉めて善を行ふべし

第十

爰も二人の童子あり、一
人を手に書を持ちて、こ
とを讀めり、此童子も勉
強しく能く書と讀むと、
見えたり
其書へ久しく用ゐたる
ものなきども、猶新き物



の如し因りて、此童子も怠惰ならざりて、又書と
大切なることと、知るなり

彼も日々學校へ行きて、小學讀本と學び習ひ得
たる所の章は、能く誦誦しく忘るゝことなかる
べし

今一人の童子も、怠惰のものに見えたり、何如と
とせられ、彼が持ちたる書は、悉く汚きまゝと所々裂
け破きたるゆゑなり

此童子は、勞しく書と讀むと雖、怠をたる處數箇
條なれば、通して讀むと能く、彼の固書と好

まごころゆゑよ、かく學びたる所と多く忘るゝを

汝の彼の顔色と見て、書と好まざることを知るや。○彼の顔色の怠惰あるを表せり、彼もし善良よしと、能く書と讀むことと好まば、其顔色斯の如くよ、見ゆることなり。

善良なる童子の、斯る顔色とい、異よしと、必聰敏よ、見ゆるものなり。

彼の能く心を用ゐざるゆゑよ、其書も破き汚きたり、斯る懶惰のものい、遂は困窮卑賤の身とな

るべし、尤識むべきことなり、すや。

第十一

昔時一人の怠惰ふるものありて、常に職業をなさば、今これと、次の圖は示せり。

此ものい、幼稚のときより、怠惰なるものより、物事に勉強をすることなく、己が職たる業と爲すこと能はず、晝は徒ら坐るる、或唯眠るのみ。

彼壯年に至りても、猶少時の怠惰と改むること能はず、故に其家貧ふしと、衣裳も帽も甚古びたり。

彼も好き衣裳と好まざるよ、たあらざれども、金
なくして、何如ぞ、好き衣裳と買ふことと得ん
や、又其業と務めずして、何如ぞ、金と得べけん
や、

彼の家の妻のり、○其妻
も、何如する衣裳を著た
うと思ふや、必破きたる
衣裳と著たるなるべし、
彼も時として、少の金
を得ることあり、されど



も、此金と以て、衣裳などを買ふことあり、即時
其金と無益に費せり、今その状と、次は説示まじ
し、

第十二

此圖は、即前の怠惰もの
して、今日、少しの金と得た
う、されども、平生酒を好む
の癖あるゆゑ、己の家
歸らざりて、真の酒店へ行
きたり、



彼の甚大酒よしく得たり金の盡るまで酒を止むることありし

彼十分酒を飲むとき其心狂亂して暴行をなし或は路傍に倒れて前後も知らず眠ることもあり

是故は時として少の金を得ることあれども飲酒の爲にこれを失ひて衣裳等々求むることを得ず

此怠惰に飲酒の極めて悪事にしてこれより多くの悪業を生ず凡て人の大飲すべきは翌日身體

體勞きて職業をなすこと能はず職業をなさざるべし金を得ることなり金を得ることなれば我日用の品も乏しくして萬事不自由あり故に或悪しき道でも金を得んことを願ひ屢人を欺くに至るものなり○されば平生戒むべきは怠惰と飲酒なり

第十三

既前示したる怠惰人の飲酒あること益止まばりて毫も職業をなすことなり稀はる職業をなさんと思ふ心の生むることありれども効

少より懶惰は慣たり身ゆゑも其身を我心の
従ひしむろこと能はずして日々慢遊と事とし
一錢をも得ることなし。

然れども飲酒の心を止むろことを得ず何如
もして金を得て飲酒せんと思ふ一念増長して
終は惡意を生じ夜々近傍の家を忍入り金銀を
盜取りて飲酒の料となせり。

斯る惡業となりて發露せざらざり無けむば遂
に捕られて獄中を繋ぐをたり。

此人は斯く獄中に入りて藁の上を居ると以て

今日に至りてはまじ
一滴の酒をも得ること能
まじくして只一人暗き處
に坐し絶て心を慰むる
ものなし。

既は惡事を犯したれば
今更悔悟をといへども
身を救ふの術なくして
終は獄中の死せり。

家には妻と小兒あり其妻は何如もして身と養



ひ、又小兒を育つるや、其次第ハ次條よ、説示をべし。

第十四

此獄中ハ死したる人の妻ハ、貧乏家よりわうて小兒を育てんとすまども、かねて一錢の貯蓄もななく、又其夫ハ、惡事をなして、獄中ハ、死する程の者なれば、村里の人々、これぞ憐み、助くるものなし、此故ハ、妻ハ、他人の、衣裳などを洗ひ、僅ハ、其日の、活計をなせども、素より、女のことゆゑ、多分の金を得ること能はず、動もされば、其小兒を、餓死し

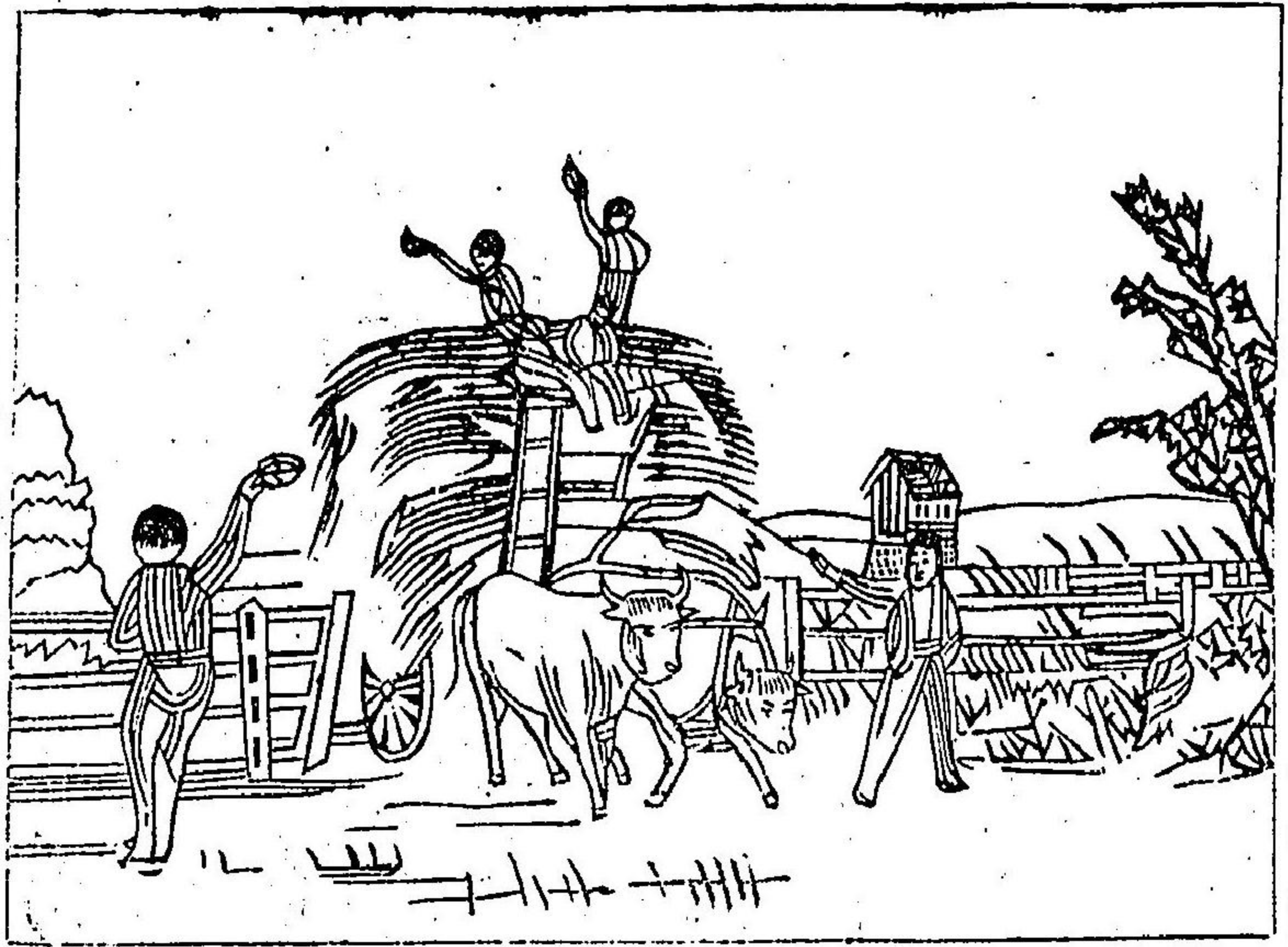
むることあるを、如何ふとも、まべきやうなく、日夜悲歎して、居たりしが、終ハ、其家より、住み難くなりて、小兒を携へ、故郷に、立ち去り、そき酒ハ、能く人々、昏迷せしめ、亦人々、狂亂せしむ。○人の困難さるも、人の悲歎さるも、人の爭論するも、又無益の言を、出だすも、道理なき事を行



ふも皆酒のなごしむる悪業なり。

第十五

此圖ハ、田舎の景色なり、
いま畠より、穀物を積み
たる車と挽きて歸り家
の門よ入らんとす、
汝ハ、此穀物と何なりと
思ふや、○こまハ、小麦ふ
く此穀物ハ、日よ乾くし、
穂を打ち落し、實と、藁と



を別つ、○其のち磨きて、これを挽き、小麦粉と為
し、各家よ貯ふ、

此小麦粉ハ、饅飩、索麵等と、製するよ、用ゐるもの
なり

麥の種類も、小麦、裸麥、大麥あり、是等と、稻、豆、稗、粟
等と、悉穀物といふ、穀物ハ、皆動物の食と為して、
身の養と、なるものあり

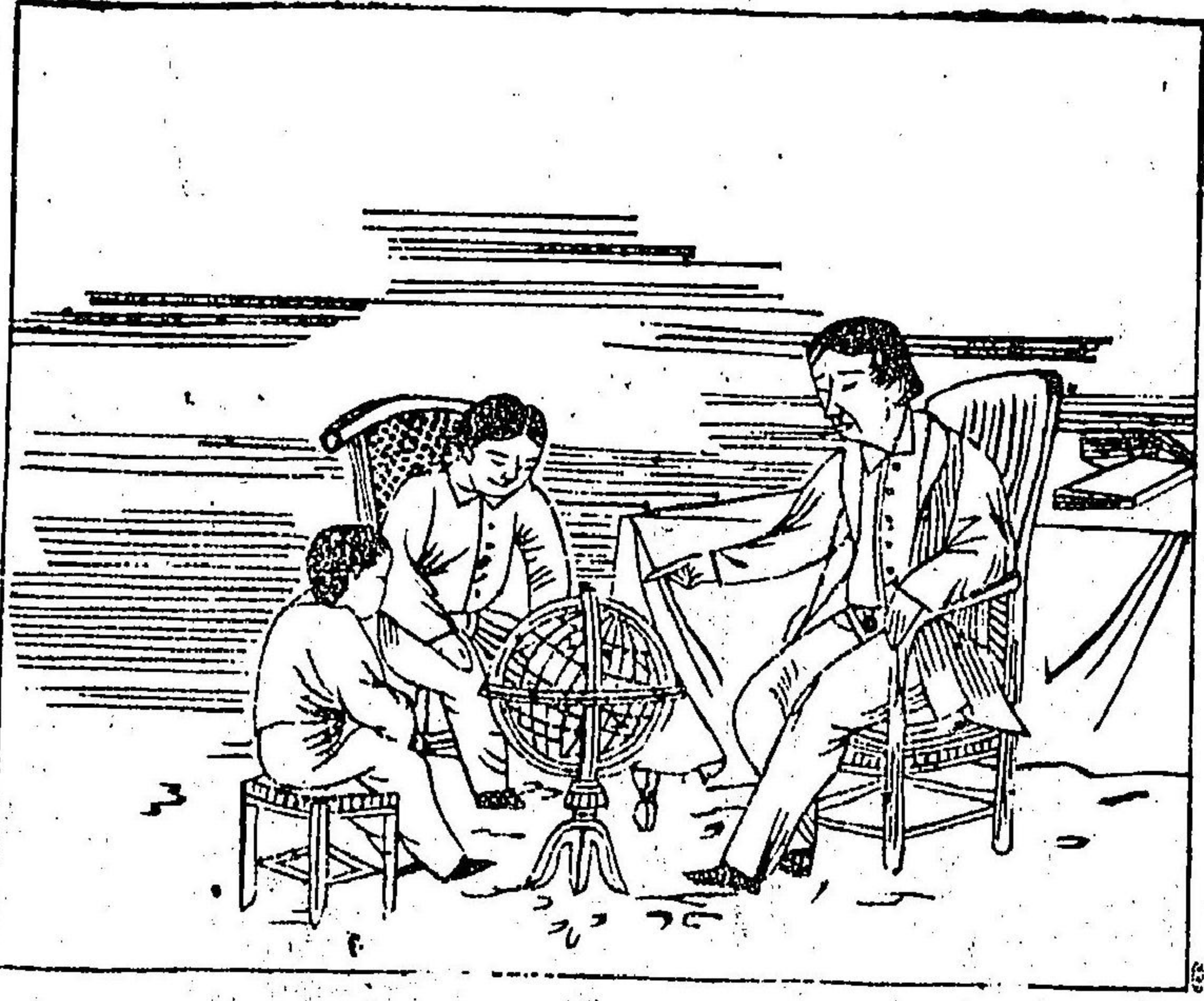
第十六

爰よ、一人の男あり、其子兄弟二人を、集めて種々
の珍しき話と、聞かしむ、

父曰予前年此世界を、一週せしとき、數多の國々
 へ到り、種々の物を見たり、一度甚しき寒國へ到
 ることありし、三個月の間、日光を見ることな
 く、其間の常に夜なり、此國の住民の雪又の氷を
 以て家を作り、人々皆其内に住めり、○兄弟曰斯
 る國へ、何處ありや、○父曰、此國も地球の南極
 と北國とも、近き處あり、

父曰予其國を於て、一の高山を見たり、其頂上へ
 甚高くして、甚寒し、頂上はあり雪いたるを融く
 ることなし、人もし、此山を登るときは、其頂上へ

達せざる前も凍死す、○兄弟曰、大陽へ、何ゆゑも、
 其雪を融くさざるや、
 又其處は夏を何らぞ
 るや、○父曰、其國も夏
 といへども、我國の寒
 中より、尚寒し、又頂上
 へ火を噴き出づる高
 山ありて、噴き出づる
 烟へ、恰も烟筒の烟の
 ごとし、予其烟を見し



よ我家の烟筒で集めて、一萬以上よ、至らざまひ
かゝる烟の出でざるべしと思へり、

此父の語の甚大あることをいれども、決して虚言
にあらず、眞實の語なり

父又曰予、大海を渡るとき、漁師の捕へたる鯨を
見たり、此鯨も、殊よ大なるものにして、長さ凡十
間餘ありて、體の高さ、三間餘あり、數多の漁師へ、
鯨の脇腹よ、穴を穿ち、腹中よ入り、桶を擔ひて、其
膏を汲み出でせり、

其他、大なる獸類を、數多見たりと、云へり、兄弟の

兒へ喜びて、父の語を聽き居たり、

凡て小兒へ、謹て、父母の語を聽くべし、

それ父母の言へ、我身よ益ありて、智識を増し、道

理よ適るものなり、子たるものへ、柔順よし、

其教よ順るべし、これ身を立つもの、基なり、

父母へ、我を育て、年も長し、智慧も、優まれば、

其教よ順ふこと、もとより、ふて、親の訓誡を、國

の制律と、同しく、敬と畏と、假よ、これ不背く

べからず

第十七

一女兒池上、小き舟を浮べたり、其舟の帆へ、只
一張あり、女兒へ、此舟は、結付けたる、長き紐を、操
りて、これ舟の、遠く流るるも、失わざる為なり、
此女兒の、浮べたる舟へ、一本の、檣あり、ゆゑ、お
もむを、スループと云ふ、

凡て舟の、檣を、帆を、張り、風を受け、舟を行くも
のなり、大海は、浮ぶる、大船も、同じ理なり、又一男
兒も、小き舟を、持ちて、これ池上、浮ぶるとき、
此舟へ、二本の、檣あり、これを、スクーネルと云ふ、
も、一三本の、檣あるとき、これを、レツプと云ふ、

なり、

凡て斯の如き舟を、帆前
船といふ、帆を張りて、行
くゆゑ、なり、帆へ、麻の、厚
き織物にて、造るなり、

船中にて、人の、をたらく
處を、甲板といふ、○船の
首を、艦といひ、船の後を、
舳といひ、右の舷を、面楫といひ、左の舷を、取楫と
いふ、○船後より、突き出で、水中より、入りたるもの



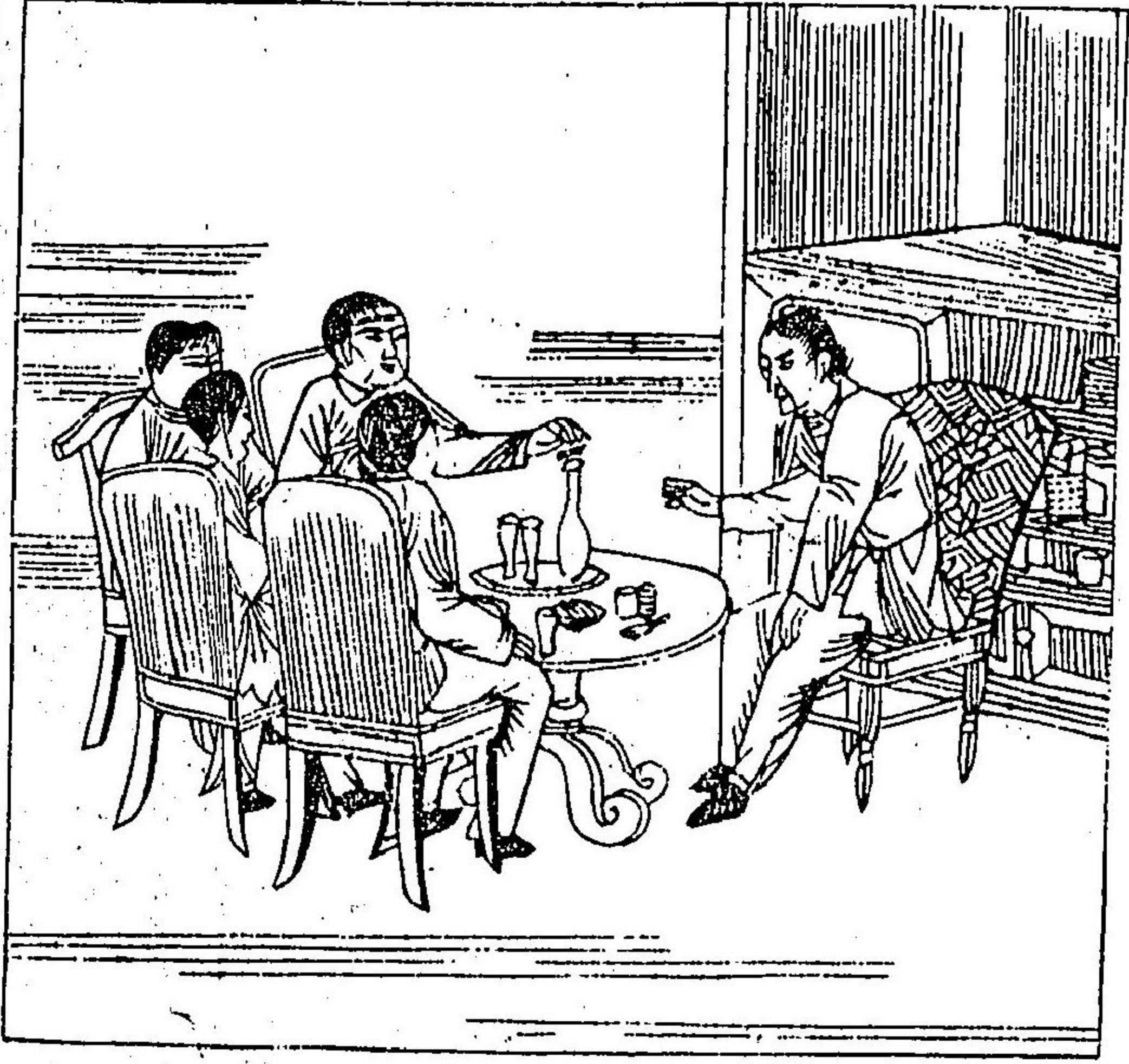
を、舵といふ舵は、船の行くべき方角を定むるものなり。

第十八

神は此地球を造り、人民の生活を為し、用ゐる物せば、皆此地球上に生ぜしむべきに、人々其道を盡して、これと求むるときは、何物も得ざる事となし、然るも人々の善惡と勤怠とは因りて、物を得ると得ざるとあり、且又人の務は従ひ物を得ると、差等なり。
今遊戯のみ耽りて、少くも心で他事を、用ゐざ

れば、此地球は、徒ら遊戯の場所となるのみ、又財を蓄ふるのみ、勞して、心で他事を、用ゐざれば、此地球は、只財を積むの場所となるのみ、
も一風車等の機關を設けて、世間は、利あることを、計るとき、この地球は、種々の機關を、設くべき場所となれり、
人々、能く心で用ゐて、世間は、利あることを、計るべし、世間は、利ある時、亦必、我身は、利あるものなり、此の如きとき、此地球を、生トたら、神慮も、合ふといふべし、

今この圖を畫けるに、富人多くの貨幣を出たして、衆人を示すに、衆人これを見て大に感じたる所あり、蓋此輩に斯る多くの貨幣を得たることなきや名なり、此富人に嘗て學校に入り、多年の間勉強して、百般の學術を覚え、先きも種々の機關を發明し、大に世上に利



益あることを工夫し、今亦其身心大利を得て、斯る富人となりたるなり、富人衆人に告げて曰、夫この地球に大活物ありて、勉むるべし、必其報あらざることをなし、人能く勉めて、世に益あることを工夫するは、苦勞する時に、其報も必大なりしと、利を得ること多きものなり、骨折まざる業を爲し、或は只一身に利あることを、勉むれば、其報必小なりしと、利を得ること、亦少し、予も多年の間、刻苦して、纔に利を得たれども、今は至りて、猶無益に時を費やすこと

なく、亦無益の財を費やさることなし、固自勉て得たる貨なきべし、皆我有よしとて、これを費やすも、隨意なりと雖無益の費やまは、正道はあらず、若美服を以て、人は驕る、又僅の貨幣と得るときは、心は怠と生ずる、實は愚よしとて、且不善あり、貨幣の最要用ふるは、衣服、食糧を購ひ、或これと貧人は與へて、其饑餓凍餒と救ふあり、貨幣と得て、これを惜と貯へ、世間の用は供へば、又貧人にも與ふることなく、又我富と以て、他人は驕るなどい、愚よしとて、吝なるものあり、人も必

これを憎み、神も必、これを罰せん、
 是を貨幣の用ある道は、由り善きものとなり、又惡きものとなり、故は道の當否は、從ひ利害とも、此貸より起るものあり、
 故は怠惰よしとて、貧賤あるは、實は恥づべきことなれども、貸のことも、愛着するも、害の根原なり、人々出精して、其業を勉め、其富を計るべし、既富めるは、至らば、これを世間の用は供へて、貧人を救ふと、第一とすべし、

第十九

平生斷えず業を勉むるは、樂しむらば、又斷えず、
遊戯を事とするも、樂しむらば、故に、就業の時間
も、出精して、業を勵む、然る後、出遊する時、そ
の樂を覺ゆるものなり。

就業中、出精せざることを、其心は、恥と懷きて、
快むらば、行の善良あるは、心の快きを得る、良法
あり、怠惰あるもの、心の快きことなし、何とな
まば、其行狀の不善なるゆゑ、恥づる所あり、
なり。

一事を成さんとせば、必其心と放つことなり、一

時は、これを為べし、或事業多くして、力も餘ること
なく、この怠慢あり、これと勉むまば、必其効あ
りて、能く成就す、故に、勉むまば、何事も易く、勉め
ざれば、何事も難し。

書を讀まんとするときは、如何に難き所にて
も、これを止めば、勉強して、得る所あり、あらずば、
まば、他事を為ることなれば、縦令力は、餘る箇條も
ても、餘念なく、勉強するときは、これと、理會せら
るものなり。

苦まはまば、樂あり、勉強の後、非ざれば、遊歩

も樂あらず故、書を讀む時、其文を理解して、
 後、遊歩をべし、業をなまこまへ、其業を成就し
 たる後、休息をべし、然るこまへ、心は恥づること
 とあまきと以て、遊歩も、身の攝生とするものなり、
 抑、恥と人心は於て、感動の大なるものあり、恥と
 知るこまへ、人々、怠慢及肆なることなし、平生、事
 を行ひ、業を勉むるよ、方うて、我心は、恥づること
 なりらんことと、欲するへ、身を守るの、要務なり、
 今業を勉めて、就らば、書を學びて、通ぜざるを、大
 なる恥なり、この、恥を知うて、出精勉強する

とき、業の就らざることなく、書の通ぜざるこ
 となし、

人の世は生れ來し、天工を助けて、國用を資する
 ものなるよ、何等の業も、勉めば、國家の益をなま
 ざるもの、自禍を招きて、困窮を陷らべし、此等
 も、天は恥ぢ、人は恥ぢ、又我心は、恥づること大あ
 り、

神は、妄よ、幸福を與へば、人を、自これを取ら
 しむもの、ふれば、唯恥を知りて、能く勉強する
 者のよ、幸福を得、恥と知らざるもの、幸福を得

ること能いざるものごとく知るべし、

第二十

禮の教化の本よりして、人民の惡念を止め善心を開き、人道を離さしめざるものなきは、須臾も違ふべからざるものなり、

人性の本善なるとして、辭讓の心と有せざるものなり、然るども、人欲の私より由りて、本然の性と失ひ、遂に放肆遊惰のものとなるあり、

人々、幼稚の時より、人欲の私より克ちて、本然の性は復たべし、父母より事ふるべきは、孝養ふるべく、

長上より事ふるべきは、恭順あるべし、兄弟の友愛も、朋友の信義も、親族の協和も、皆禮より生ずるものゆゑ、禮の身と立るとの本よりして、知るべし、貪欲の念を肆よまざることなれば、忿怒の心と、縱よすることなれば、貪欲の念まゝ、忿怒の心あるべきは、事と行ひ、業と務むるは、當りて、正路を得ること、能はざるものなり、

そは、貪欲の私情の感よりして、此念を肆よまざること、遂に殘暴の行となれば、至る、又忿怒を一時の狂疾よりして、此心を抑へざることを、遂に争鬪

の端と開くは至る必竟は皆幼稚のときよろ辭讓の心と失ふよよきう

古語よ謙は益と受く満は損と招くといへり終日業と務むまば心中は爽快を覺え今日遊怠おれば翌日繁忙の愁あり古語よまよ終身道と讓ることも百歩を枉げず終身畔と讓ることも一段と失ふべといへり是禮讓の得ありて損なきを諭せるものなり

第二十一

昔一人の童子あり天性至孝ありて善く其母よ

事へ毫も其命は違ふことなし母事を命する毎直よ立ちてこれと行ひ常よ怠らば

母嘗て紡糸を繰りて絲環は紆ふことあり其子又命じて紡糸を手に掛けしむ童子は糸を紆ふるの間過ちてこれを紛亂し解けざるゆゑ急よこれと解らんともざる却りて緒と失へり

童子既よして一の緒を求め得たるゆゑ頻よこれを引けば益固結して復解くべからざるに至る因りて更よ狼狽して一線と断せり母これを止めて曰汝過をう此の如くする時へ適よ其



紛亂と益をのみ暫汝が
心で静め思と平よりて
正き緒と求むべし既又
正き緒と得まば亂れと
る糸ハ自解くるものあ
りし

人世の業と務むるハ猶亂とくる糸を理むるが
如し是は監と宜しく汝の終身と計るべし世は
處し事に臨みて苟私欲忿怒と惑ひ己の血氣と
母又童子に告げて曰夫

抑へざれば縦令苦心焦思して其力と盡せとも
徒ら勞して功なきのみと

小學讀本卷之三終

文部省御蔵版翻刻

明治十六年九月廿七日御届

同 年十月

出版

翻刻出版人

南谷新七

大阪府南區安堂寺橋通三丁目
五十三番地平民

